

## 里山が持つ価値、美しさを未来につなげるには？

衛藤彬史（兵庫県立人と自然の博物館 研究員）

### はじめに

私の専門は農村計画という分野になります。平たく言えば、望ましい農村のあり方（未来）を展望し、実現に向けた方法を解明するための学問です。

遡ること15年前、京都に住みたいという思いだけで東京から京都の大学に進学した私は、農学部に入學し、そこで農業土木系の科目を学ぶことになりました。授業の多くは工学系で、ダムの強度計算や川の流速と護岸設計といった内容に関心を持たず（今ではその重要性は理解しているつもりです）、心からやりたいと思うような仕事も思い当たらず、怠惰な学生生活を送る日々でした。そうした中で、この農村計画という分野に、そして研究の面白さに次第に惹かれていくことになりました。

調査・研究や活動で農村をたびたび訪問する中で、そこでの人の暮らし方や生き方、自然との関わり方の中に、美しさや愛らしさを感じることがありました。特に、ご高齢の方と接したとき、また古くからの習慣や習わし、暮らしの仕方にそうしたものを感じる機会が多かったように思います。そして後になってから、それはかつて日本や日本人が大切にしていた、美しい文化や生活様式の名残なのだと気づきます。

思えば中学3年の修学旅行で初めて京都を訪れたとき、なぜか懐かしい気持ちになり、ここに住みたいと強く思ったのも、かつて日本にあった美しさの残像を京都のまちから感じ取っていたのかもしれませんが。そして、こうした失われつつある美しさや価値を、いかに未来に継承していくか、という問いは、今の研究関心や問題意識にもつながっています。

### 農村に住んでみて気づくこと

研究を進める上で、私が大事にしていることの1つに、実践と実体験があります。頭で理解できる知識と、身をもって体感している知識には、やはり大きな違いがあると感じるからです。

研究を始めるまで農業や農村に縁のなかった私は、博士課程に進むにあたり、実際に農村に住んでみることを強く望むようになりました。その後、兵庫県養父市の山奥で、空き家となっていた築100年を超える家を借りて住むことになり、実際に生活する中で交通の問題を切実に感じるようになります。

それまでも農村の課題として、頭では知らなかったわけではない交通の問題が、身をもって切実に感じられる思いがしました。自分で車の運転ができなくなることで、生活が立ち行かなくなるのが今の農村の現状です。住み続けたいと思う高齢の人たちが、移動が困難になることを理由に住み慣れた地域を離れざるを得ない現実を前に、どうにかならないのかと焦りました。そして、このことは私がたまたま移り住んだこの地域に特有の課題ではなく、全国中山間地域に共通する課題です。

地域に愛着を持ち、里山の暮らしや景観を守ってきた人たちが住み続けられなくなることで、家や田畑や山林の荒廃がいつそう進むこと、農村に息づく文化や伝統行事、慣習が途絶えてしまうこと、農村地域が抱えているといわれる多くの課題の根底に、暮らしの足の問題があるように感じました。

まだまだ答えの出ない問いですが、調べていく中で、そして実際に地域の方々と暮らしの足を創るための実践活動<sup>1,2)</sup>に取り組む中で、いくつか分かったこと<sup>3,4)</sup>もあります。紙幅の都合で内容まで紹介しきれませんが、ご関心の方は末尾に記載の文献をご覧くださいければ幸いです。

### 失われていく棚田や在来種

山間部では、はっと息を呑むような景色に出くわすことがあります。その1つが棚田です。とりわけ水張を終えた5月頃、段々と連なる澄み渡った水面を臨めば、その美しさに見惚れてしまいます。

そして、こうした棚田も失われていくものの1つです。生産性が低く、深刻な後継者不足で担い手がなくなっています。こうした課題を抱える中山間地域も多く、オーナー制度や観光資源化等、さまざまな実践が各地で進められています。

そうした中で、新たな担い手として企業が参入した棚田の再生事例や維持に向けた取組に注目し、そのための要件<sup>9)</sup>や方策についての研究を進めています。田として維持することが困難な場合には、畜産農家と連携し牛を放牧して維持する可能性等も検討しており、そのための条件や体制<sup>10)</sup>についての研究も進めています(図1)。重要なことは、棚田を守るために、できることをしようと思う人たちが、そこにいることです。詳しい内容については当該文献を参照ください。

在来種もまた、消えゆくものの1つです。今では見ることも少なくなりましたが、畔豆<sup>11)</sup>といってかつては田んぼの畔に大豆や小豆が植えられていました。毎年種取りされ、世代を越えて受け継がれることで、元の形質が同じであっても、その土地の気候や風土に合った独自の種(在来種)へと変化します。すでに多くが消えゆく中にありますが、大豆やサトイモは種と食用部が同じであるため人知れず残っていることが多く、近年再発掘され在来種として登録された種もあります<sup>12)</sup>。

そのため、小学校の環境学習等でお話させていただく際にはこのことも伝え、おじいちゃんやおばあちゃん種取りをしている人がいれば教えてほしいと呼びかけています(図2)。そうしたこともあり、地元で大豆を何代にもわたり種取りしている人が県内でも何人か見つけられました。

今の価値基準・判断で未来のポテンシャル(可能性)を損なってはいけません。いま失われつつある、そしてすでに失われてしまったものの価値は、未来にきっと価値を持ち、そして一度失われれば取り返しがつかない。今を生きる私たちにできること、やるべきことは何か。そんなことを信じながら、日々悩んでおります。

一方で、持続可能性や循環型社会への国際的な関心が高まる中、そうした価値は少しずつ見直されてきているようにも感じられます。このことは、1つの希望です。

### 身近な実践としてできること

先ほどから失われてしまったと嘆いていますが、嘆いているばかりでは仕方ありません。身近な実践の一例としては、先に述べた古い家を住み継ぐことです。厳密に何年前に建てられた家かは判明しないのですが、柱も立派で趣きがあり、建具の意匠等も美しく、空き家と



図1 放牧実施後の棚田にみられるササの紅葉



図2 さまざまな大豆に興味津々の小学3年生(小野小学校)

なっていたのが信じられないほど良い家です。しかし家は人が住まなくなると、すぐに朽ちてしまいます。ここに住みながら、楽しく快適に暮らせるようにすること。古い家は、雨漏りがしたり床や天井が抜けたりと大変です。言うは易しとならぬよう、実体験を通じて豊かな暮らしを体現していくことも 1 つの研究と思っています (図3)。

なんだ、と思うかもしれません。しかし、足の問題が解消し、余る空き家や空き施設が有効かつ快適に活用できるとなれば、農村こそが豊かで快適な生活空間だと気づいてしまう人が一気に増えるのではないかと妄想し、密かにわくわくしているのです。



図3 改装した室内で物置部屋に眠る古いすをリメイクするようす

## おわりに

本稿は、具体的な研究の中身や得られた知見の紹介・解説というよりも、研究を進める上での動機や姿勢、問題意識といった内容を中心にまとめました。ひとつひとつの研究上の成果を紹介するよりも、なぜこうした研究や実践に取り組んでいるのかを紹介するほうが、このシリーズにふさわしいと考えたためです。特に私の場合、一見するとバラバラの研究テーマに取り組んでいるのでなおさらです。前者のような内容を期待して最後まで読んでいただいた方にとっては、いささか肩透かしであったかもしれません。

改めて表題をみても、研究を進める上で、ここでいう里山が持つ価値や美しさをどう評価するか、という視点も重要です。むしろ、この価値や美しさをどう定式化し、方法論としてそれをいかに保全なり継承なりするか、を定めなければ学術上成立しない問いです。しかし、重要なのは分かるのですが、どうも私は身が入りません。もちろん、農業・農村のもつ多面的機能や価値、生態系サービス等と守るべき理由をあてがうことはできます。

しかしそうではなく、自然を身近に感じることで生まれる生活や暮らしのリズム、四季や生命のサイクルといったものの中に感ずる美しさを大切に、まだこの世界に生まれぬ次代やその先の子たちにまで、その美しさや価値を共有したいのです。

冒頭に、農村計画は望ましい農村のあり方(未来)を展望し、実現に向けた方法を解明するための学問と述べました。私はこのことを「宇宙に行くこと」とそのためのアプローチにたとえることがあります。

農村活性化や地域づくりにおける優良事例や成功事例といわれる取組や、そこでのリーダー的な人物の言動に注目し、他地域への応用をはかるアプローチは、「宇宙に行く」という目的に対して宇宙飛行士を育てるような発想であると考えています。過酷な状況下で宇宙飛行士に求められる体力、健康な身体および精神、教養、経験、語学コミュニケーション力等といった備えるべき要件を整理し、育成をはかるといったアプローチが、地域リーダーや推進役の持つ素養や条件を解明し、他地域への適用やそうした人材の育成をはかるといったアプローチであることのアナロジーとしてです。

一方で、「誰でも宇宙に行くことができる宇宙船を開発する」というのが私の研究アプローチです。高齢者や身体の不自由な人であっても問題なく宇宙に行くことができる宇宙船の開発を目指す発想、本論でいえば、どんな条件の地域であってもそれぞれの地域が持つ美しさや価値を次代につなげていくことができる(もちろん、やろうと思えば)ようなしくみを開発する、これこそが必要なアプローチであると考えています。

ですが、私一人でできることには限りがあります。そうした思いから、これまで、そしてこれからも研究に取り組んでいるということを知ってもらい、ともに悩み考え実践する仲間が増えていくことを願うばかりです。

### 引用文献

- 1) 京都新聞 丹波版 (2021.3.29 朝刊)「住民同士送迎サービス検討」
- 2) 京都新聞 丹波版 (2021.5.10 朝刊)「住民ハイヤー」
- 3) 衛藤彬史：交通不便地域での高齢ドライバーおよび非免許保有者の移動実態と望ましい外出支援策の検討、農林業問題研究 56(2)、62-69、2020年。
- 4) 衛藤彬史：配車システムを用いた住民主体交通の導入に適する地域条件と運営課題、兵庫自治学(27)、42-47、2021年。
- 5) 衛藤彬史、衣笠智子、安田公治：中山間地域での企業参入による経営耕地面積の拡大要件—兵庫県養父市における農外参入企業 11社への聞き取り調査より—、農林業問題研究 57(4)、144-151、2021年。
- 6) 衛藤彬史：新たな担い手との連携による中山間地域農業の維持システム、北川太一、伊庭治彦、三石誠司、安藤光義編「食と地域を支える-農業ビジネスの新しいかたち-」、農業と経済 88巻2号 (2022年春号)、英明企画編集、79-87、2022年。
- 7) ひょうごの在来種保存会：八鹿浅黄大豆、ひょうごの在来種保存会通信 27号、3-5、2020年。